

A・MUSEUM

vol.75
[2013.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



ツクバハコネサンショウウオ(成体)

(撮影:早瀬長利)

新種として発表された「ツクバハコネサンショウウオ」

茨城県中央部の筑波山や加波山にはハコネサンショウウオが生息しているといわれ、その生息数の少なさから危急種として茨城県のレッドデータブックにも掲載されてきました。最近、このサンショウウオが、京都大学の吉川夏彦氏らにより、形態の比較や遺伝子解析の結果から新種であると発表され、「ツクバハコネサンショウウオ」と名づけられました。成体の特徴として、ハコネサンショウウオに比べて尾が短く、頭がやや幅広いことなどがあげられます。幼生も尾が短く、体全体に銀白色の斑紋があり、尾の背側に黄色い帯が出るという特徴があります。

茨城県を代表する名山「ツクバ」の名前がつけられたこの小さな生きものを、今後さらに手厚く保護していく必要があります。

(教育課 潮田好弘)



ツクバハコネサンショウウオ(幼生)

(撮影:早瀬長利)

第58回
企画展

ぎよ・魚・漁 —淡水魚の知られざる生態を追って—
Quest for the New Realm of Freshwater Fish

地球に生息する魚類は約2万8,000種が知られており、そのうちの約4割は、川や湖など塩分を含まない水（淡水）にのみ生息する純淡水魚です。さらに生活史の一時期に淡水域などを利用する淡水魚も含めるとその数は1万2,000種を超えます。淡水は地球上の水の約0.009%であり、淡水魚の多様性がうかがえます。

水に恵まれた日本には、身近な川や池、湖などに約300種の淡水魚が生息しています。また、本県は溪流から河口、淡水から汽水まで変化に富んだ陸水環境を有し、100種を超える淡水魚が確認されています。このような自然環境の中で生活する私たちは、淡水魚を漁業資源としてだけでなく、遊漁や鑑賞など日常生活のさまざまな場面で利用し、その恵みを楽しんできました。

しかし、経済成長とともに生活スタイルや産業のしくみが大きく変化し、護岸工事や生活排水の流入、外来魚の放流などによって、淡水魚の生息環境も変化してきました。

本企画展では、私たちとかがわりの深いコイやアユ、ウナギ、サケなどを中心に、日本に生息する淡水魚の不思議な生態や人とのかがわりを紹介します。展示を通して、水辺の自然のすばらしさとともに、地域に伝わる伝統や文化などについても再発見していただければ幸いです。そして、環境の変化によって絶滅の危機に追いやられている淡水魚や、それらを保護する人たちの活動から、淡水魚の未来について考えていきましょう。（資料課 増子勝男）



築に上がった落ちアユ

(撮影：増子勝男)



西湖で“クロマス”とよばれていたクニマス 上：オス，下：メス
(提供：山梨県水産技術センター)

展示構成

1. ぎよ・魚・漁 .. からだ
2. ぎよ・魚・漁 .. 生きる
3. ぎよ・魚・漁 .. なかま
4. ぎよ・魚・漁 .. 人とともに
5. ぎよ・魚・漁 .. 追われ・守られ



那珂川の築

※展示室に築（ジオラマ）が登場します！

会 期 2013年7月13日(土)～2013年9月23日(月)

7月13日は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

※7月15日(月), 9月16日(月), 9月23日(月)は開館し、

翌日が休館となります。

※8月12日(月)は開館し、振替休館はありません。

●自然講座「ニホンウナギの完全養殖への挑戦」

日 時：7月13日(土) 13:30～15:00

場 所：博物館内

講 師：田中秀樹氏 (水産総合研究センター 増養殖研究所)

対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員：280名 (先着順)

●自然講座「カラー魚拓に挑戦」

日 時：7月20日(土) 10:30～15:00



場 所：博物館内

講 師：山本龍香氏(インターナショナル魚拓香房)

対 象：中学生以上

定 員：20名(抽選)

●自然観察会「やな(築)へ行こう」

日 時：9月22日(日) 10:00～12:00

場 所：栃木県那珂川町(現地集合)

講 師：茅根重夫氏(茨城県環境アドバイザー)

対 象：小学生以上(小学生は保護者同伴)

定 員：30名(抽選)

参加費：保険料1人につき50円



Supported by 日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION

船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

この企画展は日本財団助成事業「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」の支援により開催いたします。

展示解説員のガイドツアーに参加してみませんか

展示解説員 1

当館では、22名の展示解説員（ミュージアムコンパニオン。以下MC）が活躍しています。お客様に接することが多く博物館の顔といえるMCの仕事は、多岐にわたります。おもなものとしては、館内でのお客様への案内、展示物に関する質問や相談の受け付け、野外券売所・自然発見工房・インストラクターズルーム・図書室などでのお客様への対応などがあります。このほかにも、年3回行われる企画展では、オープニングセレモニーの司会をつとめます。また、ガイドツアーやスポットガイドなどの展示解説や、わくわくディスカバリーという親子向けの参加体験型イベントといった、お客様が博物館をより楽しんでいただけるような活動も行っています。忙しい業務内容ですが、博物館とお客様をつなぐ架け橋として、毎日笑顔で元気にがんばっています。

さて、今回は、MCのたくさんの仕事の中からガイドツアーを紹介します。ガイドツアーは、お客様に展示について興味をもってもらい、自然への好奇心や探究心を高めていただくことを目的として行っています。1日3回（10:00、13:00、15:00）、各展示室の概要とおもな展示についてMCがリレー形式で解説していきます。1回のガイドツアーで4人のMCが担当し、

第1展示室、第2展示室、第3展示室、第4・5展示室の解説を分担しています。このツアーに参加すれば、博物館の展示についてより深く理解することができます。

ガイドツアーをお客様に楽しんでいただくために、MCはさまざまな工夫を行っています。幼稚園や学校の皆さんが中心であれば、興味をもってもらえるように一つ一つの内容をわかりやすく説明します。より深く知りたいというお客様がいるときには、一つの展示物について詳しく説明し、多くの情報を提供できるようにつとめています。また、お客様がどのようなことに興味があるのかを探り、それに合わせて解説する展示物を選んでいきます。解説する展示物は、各回のガイドツアーごとによって少しずつ違うので、何度参加しても新しい発見を得ることができます。

このように、当館の展示物や来館されるお客様とともに常に進化を続けてきたガイドツアーですが、今年度中には8,000回に達する見込みです。当日は来館されたお客様に感謝の気持ちを込めて、記念セレモニーを開催しようと考えております。歴代のMCたちの8,000回分の思いが詰まったガイドツアーに、皆さんもどうぞご参加ください。（教育課 潮田好弘）



ガイドツアーのようす



詳しい解説も行います

墓参り

春の御彼岸を迎え、博物館の職員とともに、川口市のお寺に永眠される故中川志郎名誉館長のお墓参りに行ってまいりました。桜で有名なお寺で、境内の全域にわたり、安行桜をはじめたくさんの種類の桜が満開に咲き誇り、極楽浄土とはこのような風景かと思わせる雰囲気が醸し出されています。

中川先生のお墓は、高台に位置し、東に故郷の筑波山が望みできる素敵な場所にあり、生前に大変気に入

て求められたとのことでした。洋風の墓石の中心に、自ら揮毫された「志」の一字が刻まれております。先生のお名前も「志郎」でしたが、人生を前向きに、そして強い意志をもって歩まれたそのお気持ちを、墓前に残されたものと思われま。私たち後輩にその大切さを無言でお教わいただいているのかもしれない。墓前に御逝去後の博物館の報告と御礼を申し上げ、お線香を手向けしました。

コラム by director SUGAYA



イラスト：上脇田直子（ミュージアムコンパニオン）

要注意外来生物アカボシゴマダラを当館で採集

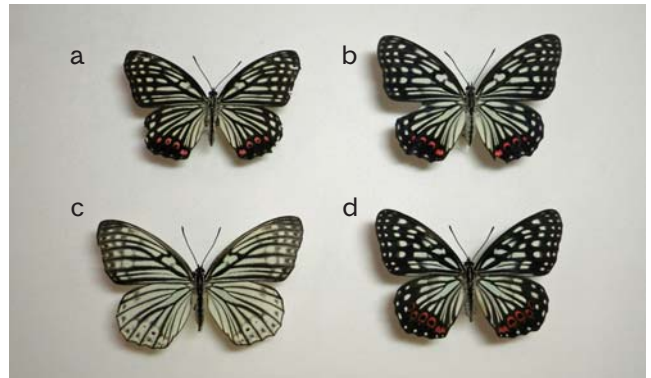
研究ノート 1

昨年、これまで当館ではみられなかったチョウがみつかりました。要注意外来生物のアカボシゴマダラです。

アカボシゴマダラの成虫は、黒地の翅に白い斑紋がありゴマダラチョウに似ていますが、後翅に赤い輪状の斑紋があり見分けることができます。海外ではベトナムから中国、朝鮮半島まで分布し、日本では奄美群島の一部のみに生息しています。

そのアカボシゴマダラが1995年に本州ではじめて埼玉県で確認された後、1998年から神奈川県を中心に静岡県や山梨県など西へも分布を広げています。また、群馬県や栃木県でも多くの確認の記録があり、関東の北部へも分布を拡大していることがうかがえます。茨城県では、2011年に桜川市で撮影されたのが最初の記録です。そして、2012年には当館で3個体が採集されています。

アカボシゴマダラは生息地により翅の斑紋などが異なる亜種が存在し、関東で分布を広げているのは、中国大陸産亜種といわれています。中国大陸産亜種の春型には、後翅の赤い斑紋が消えて翅が白く見える



当館敷地内 (a～c) と鹿児島県奄美市 (d) で採集されたアカボシゴマダラ。
a: ♂, 2012年8月1日, b: ♀, 2012年8月8日, c: ♀, 2012年6月8日 (白化型), d: ♀, 2012年7月2日。

白化個体^{ゆが}が出現し、夏型には後翅の赤い斑紋の形に歪み^{ゆが}がみられます。これらの特徴は日本産亜種にはみられません。このことから、当館で採集された個体も、中国大陸産亜種だと考えられます。この中国大陸産亜種が関東で分布を広げているのは、人の手により持ち込まれ、何らかの理由で放されたことが原因と考えられています。

関東などでみられるアカボシゴマダラは、外来生物法により要注意外来生物に指定されています。幼虫はエノキを食草とし、それを同じくするゴマダラチョウやオオムラサキなどと競合するおそれがあります。また、オオムラサキは1年に1回の発生ですが、アカボシゴマダラは年に3～4回発生するといわれ、在来の種を脅かす一因になります。

当館は利根川を挟んだ千葉県野田市に近く、野田市ですでに発生が確認されています。昨年、採集された個体は千葉県から飛来してきたものなのでしょうか、それとも県内ですでに繁殖しているものなのでしょうか。今後も、県内での繁殖状況や分布の拡大状況などの調査を進めていきたいと考えています。

(資料課 中川裕喜)



栃木県、群馬県、茨城県のアカボシゴマダラ確認地 (黒丸)

DNAのしくみ

DNAという言葉を目にしたことはありますか。DNAとは、デオキシリボ核酸 (Deoxyribo Nucleic Acid) の頭文字を取ったものです。糖、リン酸、塩基の3つから構成される小単位が鎖のようにつながり、それがらせん状に2本絡まっています。これを二重らせん構造といい、動物、植物、細菌などすべての生物に共通な遺伝子となっています。生物のからだを構築しているおもな成分はタンパク質ですが、DNAはこのタン

パク質のアミノ酸配列を決定する設計図となっています。DNAは、人間の場合、1mmの100分の1の大きさしかない細胞核につまみついて、その長さは総延長約2メートルもあるといわれ、とてもコンパクトに凝縮されているのです。

第4展示室の生命のしくみにはDNAの部屋があります。自分がミクロの大きさになってDNAの中に入り込んだように詳しく観察することができます。ぜひ生命の不思議を

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

体験してみてください。

(ミュージアムコンパニオン 荒井理沙)



DNAの部屋

シダ植物の分布が北上しています

研究ノート 2

地球温暖化の影響により種々の動植物の分布域が北上しているという現象を耳にします。例えば、茨城県では、ナガサキアゲハやツマグロヒョウモンなどの南方系の昆虫の目撃情報が急増していることなどがあげられます。

植物についてみると、植物は動物のように動き回ることはないで、分布域が北上する速度は動物ほど速くはないと考えられます。しかし、種子で分布を広げる種子植物に比べて、小さくて軽い胞子で増えるシダ植物は、その分布域を北上させる速度が速いのではないかと考えられます。

そこで、最近分布域が北上しているシダ植物について、当館や関係機関の調査で分かったことを報告します。

ハチジョウベニシダは、神奈川県南部、伊豆半島、伊豆諸島に分布するといわれていたシダ植物です。茨城県では、1990年代に筑波山で発見され、現在は北茨城市まで分布を広げ、県内の各地で生育が確認されています。1980年代に採集された標本にも、後にハチジョウベニシダであることが分かったものがあるので、だいぶ前から県内に自生していたのかもしれませんが、しかし、最近分布が拡大していることは事実と考えら

れます。

ナガバノイタチシダは、千葉県南部より南に分布するといわれているシダ植物です。茨城県では、2007年に石岡市の亀神山、2008年に笠間市、2009年に桜川市と石岡市の筑波山系の山地で発見されました。その後も何か所かで発見され、まさに今、茨城県で分布を広げつつある種であると考えられます。

そのほかにも、コバノカナワラビ、キョズミオオクジャク、マツザカシダなど、これまで茨城県では分布の記録がなかったシダ植物が、筑波山周辺の山地で最近発見されました。また、オオキジノオ、アマクサシダ、オオカナワラビ、オニカナワラビ、ノコギリシダ、コバノイシカグマなどは、もともと茨城県での生育の記録があったシダ植物ですが、最近の調査でさらに北へ分布域を広げていることが分かっています。

これらのシダ植物に共通した特徴は、その生育環境が照葉樹林とよばれるスダジイやカシ類からなる常緑広葉樹林の林床などであることや、シダ植物自体も冬でも枯れない常緑性であることです。

このような暖地性のシダ植物が、茨城県やさらに東北地方に向けて分布を広げていくことに注目していきたいと考えています。（企画課 小幡和男）



ハチジョウベニシダ

(撮影：松本 定)



ナガバノイタチシダ

ヌマチチブ

ヌマチチブは、北海道から九州の、河川の中流域から汽水域に広く生息しています。茨城でも頻りにみられる魚です。

水槽内では、筒の中や岩のすき間に身を隠し、周りのようすを常にうかがっています。なわばり意識が強いので、一緒に飼育しているヌマチチブやほかの魚が近づいてくると、背ビレを広げ、大きな口でかみついで追い払おうとします。

しかし、いつも攻撃的なわけでは

ありません。繁殖期になると、オスは筒の中や岩のすき間などに産みつけられた卵がふ化するまで一生懸命に守り続けます。卵にカビなどが生えないう胸ビレで掃除をしたり、かいがいしく世話をし、子煩悩な一面をみせてくれます。

ヌマチチブは当館の湖沼水槽で飼育展示しています。ふだん目立たない場所にはいますが、この機会にぜひ愛すべきお魚「ヌマチチブ」を探してみたいかがでしょうか。

おさかな通信

(水系担当 武藤 唯)



ヌマチチブ

展示室が新しくなりました

収蔵品紹介

当館の常設展示には、第1展示室「進化する宇宙」からはじまり、第5展示室「人間と環境」で終わる総合展示と茨城の自然を中心に紹介する部門展示（ディスカバリープレイス）があります。今回は第3展示室と第5展示室、ディスカバリープレイスの一部をリニューアルしました。

●『シーラカンスの謎』

シーラカンスは、いまから約4億年前の古生代デボン紀に出現し、中生代三畳紀にもっとも繁栄した魚類です。1938年に南アフリカのイーストロンドンの漁港で生きたシーラカンスが水揚げされるまでに約80種知られていましたが、すべて化石であったためにシーラカンスのなかまは絶滅したものと考えられていました。1997年にはインドネシアでも生きたシーラカンスが発見され、現在ではアフリカ大陸周辺の *Latimeria chalumnae* とインドネシアの *Latimeria menadoensis* の2種が生息していることが分かっています。

当館で展示しているシーラカンスは、*Latimeria chalumnae*で、全長が約90cmの若い個体です。このサイズの個体は国内にはほかになく、とても貴重な標本です。このシーラカンスは「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」（ワシントン条約）に抵触するとの理由から輸入業者に対して輸入が許可されず、東京税関に保管されていました。この展示は、東京税関からの長期借用により実現しています。

今回は第3展示室の一角を使い、インドネシアの深海で泳ぐシーラカンスの映像やマダガスカルとレバノンで発見された実物化石、全長3.8mもある史上最大のシーラカンス化石の頭部レプリカなども展示しました。この新しい展示を通して、4億年以上の時を超えて生き続けるシーラカンスの謎に触れていただきたいと思います。



「シーラカンスの謎」

●『自然環境と絶滅危惧種』

第5展示室のテーマは「人間と環境」であり、人間生活と自然環境や、生きものたちとのかかわりについて考えていただく展示コーナーです。今回のリニュー

アルでは、博物館に収蔵されている絶滅が心配される動植物の標本を少しでも多くの方々にみただけのようにと考えました。剥製やレプリカなど、生きものたちの姿がわかりやすい資料とデジタルコンテンツとを組み合わせ展示し、茨城県における絶滅危惧種の現状や、絶滅危惧種を守ろうとする取り組みについて紹介しています。



「自然環境と絶滅危惧種」

●『標本は語る～自然の“蔵”としての博物館～』

ディスカバリープレイスは「発見」をテーマに数々の標本から茨城の自然を探求する展示スペースです。

今回のリニューアルでは、当館の収蔵庫に保管されている約30万点の標本にスポットを当てています。標本の多くは収蔵庫に保管され、自然の成り立ちや変化を研究するための大切な資料となっています。今回の展示は、「標本」、「博物館」、「収蔵庫」をテーマに、標本やその製作過程、博物館の役割、収蔵庫の機能について紹介する構成としました。展示室は、自然史研究がはじまったころの研究室をイメージした木目調でレトロなつくりになっています。

展示の一部には、標本を保管している収蔵庫（標本庫）の中を学芸員が紹介する映像があります。大迫力の動物標本、整理された植物標本、大きいものから小さいものまである地学標本など、ふだんはみることでできない収蔵庫の中をのぞいてみることができます。

（資料課 増子勝男）



「標本は語る～自然の“蔵”としての博物館～」

トピックス

○図書室をリニューアルしました

この春、当館の図書室に約2,200冊の新しい図書が入りました。その内訳は、幼児・児童向けの図書や紙芝居などが約650冊、一般向けの自然科学関連図書が約750冊、教育・図鑑関係が約800冊です。これにあわせて書架を増やし、既存の図書も含めて配置を見直して整理しました。さらに、児童書の分類表示にイラストを加えることで、子どもたちにも本が探しやすいように工夫しました。

また、図書室をより利用しやすくするために、現在図書の検索システムの整備を進めています。キーワードを入力して検索することで、読んでみたいテーマや内容の本を探ることができます。

今回の図書購入にあたっては、友の会会員の皆さんや来館者の方々を対象にアンケート調査を実施し御協力いただきました。皆様からいただいた御意見などをもとに、自然博物館ならではの図書を購入しました。最新の情報が入ったものや、魅力的なテーマのものがたくさんあります。来館された際には、リニューアルされて充実した図書室をぜひのぞいてみてください。きっとお楽しみいただけると思います。

(資料課 滝本秀夫)



新しい書架(右)と一新された児童書

○レッドデータブックの刊行について

2013年3月、レッドデータブック「茨城県における絶滅のおそれのある野生生物 植物編2012年改訂版」が茨城県生活環境部環境政策課から刊行されました。茨城県では1997年に最初のレッドデータブック植物編が出ているので、今回の出版は16年ぶりの改訂ということになります。今回のレッドデータブックに掲載された種数は576種で、1997年の391種と比較して約1.5倍となっています。この数の増加からみても、植物に迫っている危機的な状況が推測できます。

このレッドデータブックの刊行に携わった委員は、委員長の中崎保洋氏をはじめ、長年にわたり県内の植物研究に関わってきた8名の専門家です。私も当館を代表し委員の1人として参加しました。リストの改訂と各

掲載種に関する情報のとりまとめには、約3年かかりました。このレッドデータブックが、茨城県において植物の保護や環境の保全に役立つことを願っています。

(企画課 小幡和男)



旧レッドデータブック(左)と新レッドデータブック(右)

○シンポジウム「コケに魅せられて」を実施しました

2013年5月3日、シンポジウム「コケに魅せられて」を実施しました。当日は、120名以上の方に御参加いただき、会場は熱気にあふれていました。

国立科学博物館の樋口正信先生からは、不思議で面白い「ナンジャモンジャゴケ」について、国立極地研究所の伊村智先生からは、南極の湖底に眠る神秘的な「コケ坊主」についてお話いただきました。また、基礎生物学研究所の長谷部光泰先生からは、世界中で研究されている「ヒメツリガネゴケ」の最先端のお話を、『コケはともだち』著者の藤井久子先生からは、コケを100倍楽しめる方法を伝授していただきました。4名とも、ユーモアたっぷりにわかりやすくお話くださり、時には笑い声がわいたり、時には会場が水を打ったように静まりかえったりと、参加者の皆さんが一体になって聞き入っている様子が印象的でした。最後の質疑応答の時間には、小学生と中学生の可愛らしい「コケ研究者の卵」から高度な質問が先生に投げかけられる場面もありました。豪華な演者の方々のお話から、参加者の皆さんにはコケの魅力が存分に伝わったのではないかと思います。(資料課 鵜沢美穂子)



左から樋口先生、伊村先生、長谷部先生、藤井先生

こけティッシュ！ フレッシュこけガーデン



展示室に広がるフレッシュこけガーデン



2階の窓からみたフレッシュこけガーデン

第57回企画展「こけティッシュ 苔ワールド！」が3月16日から開催されました。

この企画展では、身近にありながら、あまり目にとまることのないコケに焦点を当て、拡大模型を展示したり、映像を多く取り入れたりして、わかりやすい展示を試みました。さらに、この企画展示室の中央には円形の大きなコケ庭を用意して、目の前で生きたコケをみていただきました。

フレッシュこけガーデンと名づけたこの大きなコケ庭は、4つの扇形の部分と中央の水槽の部分から成り立っています。扇形の部分の内3つには、平地、山地、湿地といった異なった生育地ごとのコケを数種ずつ植えました。残りの扇形の部分には屋上緑化などに用いられるエゾスナゴケのパネルを設置しました。また、中央の水槽には、水生のコケを植えました。

コケたちは植えられたときの姿そのままではなく、胞子のうを伸ばしたり、ほかのコケを押しつけながら

生育範囲を広げるコケがあったりと、企画展オープン期間中、少しずつ姿を変えて、みる人を楽しませてくれました。また、フレッシュこけガーデンでコケを観察するイベントも行いました。そのイベントでは、霧吹きで水をかけてエゾスナゴケの葉が開くようすをみていただきました。瞬く間に葉が開くようすに驚いた方も多かったようです。

ちょっと目線を変えて、コケに注目してみると、みだことのない不思議な世界が広がっているかもしれませんね。
(資料課 野堀秀明)

編集後記

博物館に赴任し2年目となる今年度、本誌の編集担当となりました。自然博物館ニュース「A・MUSEUM」は博物館の活動内容を伝える、いわば広報の顔とも言える存在だと思っております。博物館に勤務していると、自然の様々な姿や仕組みを知り、その奥深さに感動することも多いですが、その感動を少しでも多くの方に届けることができれば幸いです。どうぞよろしく願いいたします。(Y.U)

交通案内



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - ＜鉄道・バスご利用の場合＞
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
 - 東武野田線愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※7月15日(月)、9月16日(月)、9月23日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※8月12日(月)は開館し、振替休館はありません。
- ※6月24日(月)～6月29日(土)は館内整理のため休館となります。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テブル、椅子及びイベント等のお持ち込みはご遠慮ください。

自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課／発行2013年6月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム (アミューズメント+ミュージアム) をめざしています。